ART TAITO-KU 17

Taito-ku
Art Project
Archive
2008→2017

平成29年度

企画

- ペヤンヌマキ×安藤玉恵生誕４０周年記念ブス会「男女逆転版・痴人の愛」
- 路上生活の身体から生まれるダンス、ソリケッサ！東京路上パフォーマンスツアー
- 居間theater×地理人企画 台東区・西京市同時開催 芸術祭「Fiction」
- 花火
- 自由な女神博覧会
- アサクサエンターテイメンツ

短評

100年以上続く老舗の旅館を舞台にした物語を、実際に築100年以上を超える上野市田邸で開催した演劇『花火』など、６つの作品が採択された29年度。様々な視点から作られたアートが、台東区を盛り上げてくれました。またこの年、支援制度10年目を迎えましたが、これまでを振り返ってみても審査の方向性には大きなブレは感じられませんでした。今後は、10年間の知見をもとに、さらなる台東区の発展と制度の充実を目指していきます。

Title
ペヤンヌマキ×安藤玉恵
生誕40周年ブス会 リーディング
男女逆転版・痴人の愛

主催者
ブス会

開催期間
2017.07.15—16

会場
ギャラリースペースしあん

ギャラリースペースしあん

同じ年の二人が節目の年にタッグを組む新シリーズ

「ブス会」は、劇作家であるペヤンヌマキが舞台作品を上演する為に立ち上げたユニットで、境界線に立たされた女性たちの悲喜こもごもから、現代日本に生きる女性のリアルをあぶりだしつつ、時には「したたか」に、時には「しなやか」に逞しく生きる女性の姿をシニカルさと優しさが共存する観察眼で描いた作品を発表しています。今回の公演『男女逆転版・痴人の愛』では、劇作家ペヤンヌマキの新しい挑戦として、1924年の発表から約100年の時を超えて読まれ続けている不朽の名作、谷崎潤一郎の長編小説である「痴人の愛」を現代に置き換え、男女の設定を逆転し披露しました。公演会場は、築60年の民家を改造し活用している「ギャラリーしあん」です。作中に登場する主人公が暮らしていたような雰囲気がある風情豊かな古民家です。定員30名という小規模な会場で間近で繰り広げられる役者たちの迫力ある演技は、大きな劇場では体験することのできない、この企画ならではの贅沢な演出を実現することに繋がりました。

【開催状況】

谷崎潤一郎の名作「痴人の愛」では、男性である謙治が女性であるナオミに翻弄されていくという話ですが、100年の時を超え、女性も男性と同等に勤労するようになった時代背景から、「女性」が「美少年」に翻弄されるという逆転の発想が非常に現代的であると考え、男女を逆転した内容でブス会版「痴人の愛」を披露しました。今回の公演は、12月にこまばアゴラ劇場で披露する本公演に先駆けたリーディング公演として2日間・計5回の公演を実施しました。少人数の役者による朗読とチェロの生演奏というとてもシンプルな構成ですが、古民家の玄関から部屋に入る・縁側やお庭を使うといった古民家という空間を最大限に活用した演出により、美しく官能的なこの作品の世界観をより一層深めることができました。今回のブス会版「痴人の愛」公演を実現するにあたり、美少年ナオミに翻弄される主人公“私”役に台東区在住で、現在舞台・映像にと活躍している女優の「安藤玉恵」・美少年“ナオミ”役には、劇団唐組の若手ホープ「福本雄樹」・ナオミの友人役“浜田”役には、近年舞台のみならず映像での活躍もめまぐるしい「山岸門人」という個性豊かなキャストが集結しました。リーディングという形態や通常の劇場とは違った古民家での上演・チェロの生演奏といった試みは、すべてブス会にとって初めての試みでしたが、とても刺激的な創作体験となりました。今後については、この作品をよりたくさんの方に観ていただけるよう劇場での本公演のほか、地方公演や本作の映画化・小説家等、様々な展開を企画・計画していきたいと考えています。

公演の様子

企画者からのコメント

支援制度を受けたことにより、金銭面の支援だけでなく、作中に演奏するチェロの選曲のアドバイス、本公演の内容に繋がるアドバイスなどアドバイザーの方から様々な協力を得て、企画にとって大きなプラスになりました。また、企画を終えて様々な反響をいただき、本公演の演劇公演を実施したところ、たくさんのお客様に足をお運びいただきました。また、リーディング版は久留米を始めとする地方公演が次々と決まりつつあります。

公演の様子

公演の様子

チラシ

photo by Takeshi Kawahara

Title
路上生活の身体から生まれるダンス、ソケリッサ！東京路上パフォーマンスツアー～路上にて生まれる景色と未来の行方～

主催者
一般社団法人アオキカク

開催期間
2017.09.08、2018.03.09

会場
台東区立隅田公園、台東区立玉姫公園

ダンス芸術による「生きるからだ」の探求

一般社団法人アオキカクは、路上生活者の身体表現「新人Hソケリッサ！」の活動と、「踊りは誰でもできる」を合言葉に、今あるそれぞれの身体を誰もが肯定することを第一としたワークショップ活動という2つのアプローチで展開。「生きるからだ」の探求を絶えず行い、自他の身体を肯定する社会づくりを目指しています。今回、活動のひとつである「新人Hソケリッサ！」の活動10周年を記念して、東京近郊の路上や屋外スペースを巡るパフォーマンスツアーを年間通じて開催しました。「ソケリッサ！」とは造語であり、「それ行け！という言葉の勢い・前に進む」という意味が込められています。2005年から演出を行うダンサー・振付家アオキ裕キが、「生きることに日々向き合う身体」をテーマに、路上生活経験を持つ方々を集め活動を開始。近年では2015年シンガー寺尾紗穂とのコラボレーションによる日本全国13か国でのツアーが実現するほか、金沢21世紀美術館企画「カナザワ・フリンジ2016」、山形市中心市街地で2年に1回開催される「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2016」、ブラジルにてリオ五輪プログラムセレブラ「With one voice」、JCDN主催「踊りに行くぜⅡ」などに参加した経歴があります。

【開催状況】

「新人Hソケリッサ！」活動10周年を記念したダンスツアーの一環として、台東区では隅田公園と玉姫公園の2会場で公演を披露しました。◉「新人Hソケリッサ！リバーサイドダンス」…台東区で初となった公演会場は、スカイツリーを望む隅田公園展望広場。展望広場からの眺望を楽しみに訪れる観光客や、公園内を散歩する地元住民で賑わう公園に、夕暮れとともにパフォーマンスが登場しました。ダンスパフォーマンスだけでなく、会場にあわせた音響・照明などの一定のクオリティーを持たせる演出により、この場所でしか出来ない特別な空間となりました。約40分間の熱いパフォーマンスに、通りすがりの人々も足を止めて見物されていました。

◉「玉姫公園ライブ&パフォーマンス」…玉姫公園での公演は、当初10月に近隣の玉姫稲荷神社前道路で開催する「きむらとしろうじんじんの野点（谷中のおかって主催）」と連携して開催する予定でしたが、台風の影響で延期を余儀なくされました。そのため、再度地元NPOや出演者との調整を経て、3月での開催が実現しました。本公演では「新人Hソケリッサ！」によるパフォーマンスのほかに、音楽家・文筆家として活動するシンガー寺尾紗穂によるピアノの弾き語りライブや、「新人Hソケリッサ！」メンバーが寺尾さんの楽曲にあわせて即興のパフォーマンスを行うコラボレーション企画などを披露。また当日は、地元NPO法人山友会や、ひとさじの会、他ボランティアの方々の協力により、観客のみなさんに温かいお味噌汁などが振る舞われました。

photo by Takeshi Kawahara

玉姫公園ライブ&パフォーマンス

企画者からのコメント

支援制度を受けたことで、会場交渉・金銭支援面・アドバイス体制の獲得はとてもプラスになりました。排他的路上生活者を軸とする我々の活動と、台東区の連携体制が形になったことはとても進展的で感謝をしています。企画開催により活動認知度は広がり、もっとダンスを知らない人にも提供しようと、参加メンバーの意識の高まりも感じました。継続的な活動を目指すに当たって、協力団体との繋がりが生まれたことも大きな収穫となりました。現在は、海外の路上パフォーマンス計画も進めています。

隅田公園リバーサイドダンス

photo by Takeshi Kawahara

玉姫公園ライブ&パフォーマンス

チラシ

photo by Yumi Kanemitsu

photo by Yumi Kanemitsu

Title
居間 theater×地理人
台東区・西京市同時開催
芸術祭『Fiction』

主催者
居間 theater、地理人

開催期間
2017.11.28、2018.03.20 —
（作品は2018年4月以降も継続して体験可）

会場
HAGISO、TAYORI

想像力を使って参加する、ふたつの都市のための芸術祭

本企画は、谷中の最小文化複合施設HAGISOを拠点に活動するパフォーマンスプロジェクト「居間 theater」と、空想地図を制作する今和泉隆行（以下、地理人）の協同企画。現実の都市・東京と空想の都市・西京（さいきょう）という、２つの都市で同時開催する「空想型芸術祭」を制作、披露しました。居間 theaterが芸術祭を体験するための音声作品を、地理人が空想の都市「西京市」の地図を制作し、空想（=フィクション）で2つの都市を繋いでいきます。「空想型芸術祭『Fiction』」…現実都市・東京都台東区と空想都市・西京市にて、2018年3月20日から同時開催となった、都市に住む人や都市で働く人のための芸術祭。東京では現実の街のなかで、西京では空想の街のなかで、音声を体験できるという仕組みです。作品は音声のみのため、会期は設けず、音声を想像力で体験する内容としました。

「西京市」…地理人が、「中村（なごむる）市」の次の段階を目指し制作する新作空想地図。「台東区」という街の要素を持ちつつも、どこか別の街かもしれない。そんな現代都市の姿を映し出す架空の地図を演出しました。

【開催状況】

まず地図制作と音声作品の2つを軸にリサーチ。そしてそのプロセスを共有しながら進行し、それぞれの側面や切り口から相互に影響を与えながら作品を制作しました。

◉トークイベント「空想都市会議」…作品制作に向けたリサーチプロジェクトの一環として、最小複合文化施設HAGISOでトークイベントを開催。新しい空想都市「西京市」を描くにあたり、都市の要素をいかにして地図に落とし込んでいけるかなど、複数の地理的目線から都市について検討するという目的でトークをしました。ホスト役の地理人のほかに、ゲストとして地理学や都市計画などに精通する古橋大地氏と枝久保達也氏を招聘。また当日は参加者からの意見も募り、様々な視点から新しい空想地図を検討していきました。

◉キックオフイベント「Fictionインフォメーションセンター」…作品のキックオフイベントとして開設した1日限定の「Fictionインフォメーションセンター」は、谷中銀座近くにひっそりと佇んでいるTAYORIというお惣菜・珈琲のお店で実施。音声作品と西京の地図のお披露目にあたり、芸術祭の参加方法、コンセプト、空想地図、今後の展開などを様々な方法で伝える場としました。当日は6つの作品を体験する場所を示した東京と西京の地図が表裏になったポストカードを配布。参加者はポストカードに印刷されたQRコードから音声作品を視聴し、この一風変わった空想型の芸術祭を体験しました。本企画はキックオフイベント以降も、更にリサーチを進め、音声作品の追加などを行いながら継続的に展開していきます。

photo by Yumi Kanemitsu
投書箱

企画者からのコメント

台東区というリサーチベースを設定できたことで、創作の重要な起点や足掛かりをつくることが出来ました。また、プロジェクトで最も手間や資金、時間がかかるスタートアップを支援していただいたことで、今後企画を展開し続けて行く上での基盤を制作することが出来ました。制作し公開したWEBサイトなどの作品は、10年、20年と長時間残せる限り公開し続けていき、また音声作品や地図は引き続き制作し、そして出来上がったものから順次公開し体験出来る仕組みを、今後は整えていきたいと思っています。

空想都市会議の様子

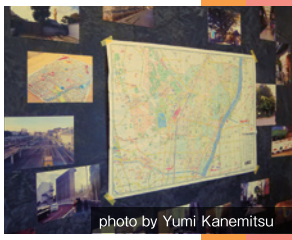


photo by Yumi Kanemitsu

ポストカード

Title
花火

主催者
田川啓介（水素74%主催）

開催期間
2017.12.05—13

会場
市田邸

市田邸

リアリティーを追及する演劇

「水素74%」は、主宰である田川啓介の作品を上演するプロデュースユニットです。2010年に発足し、他人を顧みず自己の利益だけを考えて自己保身に走ったり、他人に罪をなすりつけたりしようとする人々の醜態を笑いと悪意を交えて描いた作品を発表しています。今回の公演では、リアリティーを追及する演劇を目指しました。セットでそれらしい場所を捏造するのではなく、本物の場所に観客を連れて行き作品を見せるという試みにチャレンジした意欲作です。今回公演した『花火』は、とある寒村にある100年以上続く老舗旅館を舞台に村興しの為の花火大会の開催に向けて右往左往する人々を描いた群像劇です。花火大会を一週間後に控えた花火大会実行委員による、緊急会議の様子を中心に展開されていきます。

【開催状況】

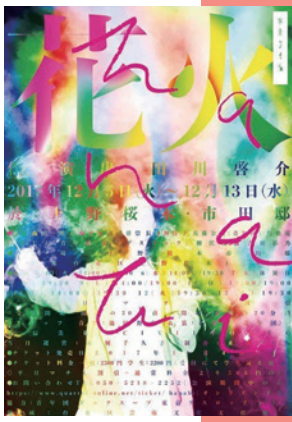
リアリティーを追及する演劇を目指し今回公演会場として選んだ「市田邸」は、江戸から明治に続く寺町お座敷町の風情を現代に伝える、築100年を超える日本家屋です。現在では芸術文化活動の拠点として町に親しまれており、国の有形文化財にも登録されています。劇場にそれらしい舞台芸術をつくるのではなく、築100年を越える市田邸の座敷をそのまま使用。物語の舞台である老舗旅館の一室とすることで臨場感をより生み出し、また客席を隣室の六畳間に設けることで、今まさにそこで紛糾する会議が起こっているかのような生々しさを味わっていただくことに成功しました。定員25名という小規模な公演ですが、目と鼻の先で繰り広げられる役者の演技は、通常の劇場では体験することが出来ない特別な空間となりました。『花火』は、村興しのための花火大会を一週間後に控えていたとある寒村が舞台の作品です。一見するとごく普通のどこにでもいそうな登場人物たちが、表向きは花火大会の開催に向けてそれらしい事を言いながらも、保身・利権争い・色欲・金儲けなど各々の欲望を巡って徐々に紛糾していくという物語です。登場人物は、西川（同じ実行委員である由美と不倫関係）・由美（西川と会う口実を作るため参加）・天野（妹の幸子を花火プロデューサーとして参加させたい委員長）・大川（火事被害者の先輩を持つ委員）・幸子（自身の必要性を感じず辞めたい花火プロデューサー）・栗田（花火大会で利益を得ている老舗旅館の跡取り息子）・細井（火事被害者）・村田（自身で中止・決定の判断を下したくない村長）・紀子（浮気に勘付いている西川の妻）といった立場や思惑の異なる9名です。冬開催の公演でしたが、設定である真夏を感じさせる衣装や小道具（蚊取り線香・虫刺されの薬・うちわ）等を上手く活用することで、物語の世界観を違和感のないように表現しました。

公演の様子

企画者からのコメント

作品については俳優とスタッフと話し合ってつくっていますが、制作は自分ひとりで行っています。そのためデザイナー以外と話し合う機会が無く、今回支援を受けて初めてちらしの掲載事項やデザインについてもアドバイスをいただくことができ、今後のちらしづくりの参考になりました。また、今回実際にある古民家を舞台美術としてそのまま使うことによって、つくりものでは得られない雰囲気が出ることが実証できました。今後も劇場での上演と並行して場所の力を使って、その場所をそのまま舞台美術とする公演を行っていきたいと思います。

公演の様子



チラシ

メンバー

photo by Mao Matsukawa

photo by Mao Matsukawa

photo by Mao Matsukawa

Title
自由な女神博覧会

主催者
村上愛佳

開催期間
2018.01.11、02.11、03.11

会場
上野恩賜公園芸術の散歩道

上野恩賜公園芸術の散歩道

震える世界、歩き出す自由。まだまだ移設先は募集中！

『自由な女神博覧会』は、東日本大震災の津波で傷つき撤去された宮城県石巻市の自由の女神像のレプリカを譲り受け、アート作品に再生したというプロジェクトです。「自由な女神」は、もともと石巻市の旧北上川の中州に建てられていたもの。宮城県出身の漫画家、故石ノ森章太郎さんの記念館があり、中洲の風景がアメリカのマンハッタンに似ていることから「マンガッタン」と地元で呼ばれていた公園の、シンボルのような存在でした。東日本大震災の大津波により腰から左足にかけてえぐり取られたものの、鉄の支柱のおかげでなんとか持ちこたえ、津波に耐えた「希望の象徴」として当時話題になりました。しかし、傷んだ部分の劣化が激しく2014年に撤去されると、活用・保存しようという機運は急速に冷め、使われる当てもないまま倉庫に保管されていました。そこで、2016年に市を介して所有者から無償で譲り受け、被災した女神像のあり方や今後の行方を考える「現在進行形アートプロジェクト」として展開することにしたのです。

【開催状況】

譲り受けた女神像は、どこでも行くことの出来る「自由な女神像」と命名。東京藝術大学での卒業作品展を経て、2017年4月から上野恩賜公園芸術の散歩道に1年間限定で展示が実現しました。この企画は、現在ニューヨークにそびえるオリジナルの女神像が1878年のパリ万博にて完成した頭部のみを展示し全身建築の寄付を呼びかけたことで、約40万ドル相当の寄付金を集めることに成功したという歴史をベースにしています。女神像にとって万国博覧会は旅の途中経路であったのではないか、そしてそんな旅路がパリ万国博覧会から数百年後の遠い国、日本でも行われているのではないかと考え、博覧会と名付けました。また、日本の「自由な女神」は今後どこに行くのか、オリジナルのように新たな地へ出発することができるのだろうか、などという問いによって震災に思いを巡らせる機会にもなってほしいと考えました。そのため、東日本大震災が起きた3月11日にちなみ平成30年1月から毎月11日に、実際に現在女神像が設置されている上野恩賜公園芸術の散歩道にて、本プロジェクトのPRを開催しました。当日は、女神像の経緯や東日本大震災、オリジナルの女神像などを説明するパネルを設置したほか、これまでにお寄せいただいた次の移設先の候補地を紹介。また、お揃いの青いユニフォームを着用したスタッフを博覧会ブースに常駐させ、博覧会を訪れた方々に解説（パフォーマンス）を行いました。上野恩賜公園内では異質な存在である上半身だけの女神像の存在に、道行く人も多数足を止めて見物いただき、大盛況のうちに上野恩賜公園での展示を終えることが出来ました。

photo by Mao Matsukawa
当日の様子

企画者からのコメント

担当者がイベントの実現のために手順を組んで導いてくれたことや、アドバイスをいただけたことにより今までにない有意義な制作活動になりました。また、今回築き上げたスタッフの連携は、今後の活動にも活かすことができるかけがえのない副産物となりました。現在、自由な女神像は長野県東御市にいます。自由な女神プロジェクトによって表出される移動の困難さや、人の差別意識、地域住民の理解といった諸問題に新たに向き合っていきたいと考えています。

photo by Mao Matsukawa
当日の様子

photo by Mao Matsukawa
当日の様子

チラシ

photo by Mao Matsukawa
メンバー

photo by Takashi Osaka

Title
アサクサエンターテイメンツ

主催者
アサクサ実行委員会

開催期間
2018.02.18—03.04

会場
アサクサ

大衆文化を地政学の視点から批評的に考察する映像祭

「アサクサ」は、30平方メートルの一般住宅を改築したキュレーションスペースで、アーティストの制作活動から普及イベントの実施まで、批判的思考を促す現代アート事業を企画・実施しています。今回、浅草を訪れる国内外からの観光客および近隣住人の皆さまをお招きし、大衆文化を地政学の視点から批評的に考察する映像祭を開催しました。

【開催状況】

本企画は、これまでに展覧会や上映会で関わってきたアーティストを含む全9組の作品で構成されました。＜Aプログラム＞ ◉イム・フンスン「北漢山」(2015年)…北朝鮮出身の女性が、中国・韓国にわたり、歌手となった半生を語るモノローグと歌曲「イムジン河」の独唱からなる映像作品。◉コラクリット・アルナーノンチャイ「おかしな名前の人たちが集まった部屋の中で歴史で絵を描く4」(2017年)…元タイ王国大使であった祖父母への眼差しを通して、70年代の学生運動に派生したカウンターカルチャーや新興宗教に現代における神話を読み取った作品。◉トリン・T・ミンハ「ベトナムを忘れること」(2015年)…ベトナムの神話や戦争を経た人々の、今と昔を問い直している作品。◉アントン・ヴィドクル「全人類に不死と復活を！」(2017年)…真の宗教は先祖信仰であると唱える思想家ニコライ・フョードロフの著作を紐解き、「復活」の場として博物館を扱った作品。＜Bプログラム＞ ◉ミン・ウォン「世界の窓＜パート4＞」(2018年)…タルコフスキー作品「ソラリス」に言及しつつ、広東オペラとSFのつながりを示唆。◉ヒト・シュタイエル「ノーベンバー」(2004年)…自身の10代からの親友アンドレア・ヴォルフの肖像を起点に、ポスト革命期におけるイメージの役割を考察。◉佐藤満夫、山岡強一「山谷-やられたらやりかえせ」(1985年)…山谷における労働者と暴力団の確執を描き、高度経済成長期の裏側に築かれた支配構造を暴きだす作品。＜Cプログラム＞ ◉ヨシュア・オコン「ミアスマ(汚染)」(2017年)…メキシコ人ジャーナリスト、マヌエル・ブエンディアの出版物を起点に、目に見えるものとその裏側をジョージ・ブッシュの銅像に擬えて表した作品。◉ミヌク・イム「国境を越え呼びかける周波数」(2011年)…一種の波長として歌が生まれ拡がり始めるプロジェクトを記録した作品。
会期中は浅草郵便局、都営浅草線改札前の(株)プライスにもモニターを設置し、街頭上映を行いました。

photo by Takashi Osaka
アサクサ

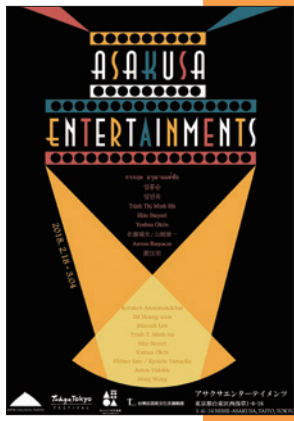
photo by Takashi Osaka
上映中の様子

企画者からのコメント

現代アートは、作品が持つ国際性に対して、いまだ多くのオーディエンスに浸透した広い認知を得ているとは言い難い現状です。本企画は大衆文化にゆかりの深い浅草の歴史を背景に、その土地の住人と観光客に現代アートの一面を紹介する上映祭。区とアドバイザーの協力で、本企画がさまざまな文化領域の視点からどのように見えるのかを多角的に検討し、意見を反映させることができました。支援制度採択後、アーツカウンシル東京および公益財団法人朝日新聞文化財団からの助成採択が決定し、二度目の開催を2018年9月に予定しています。また、先に2018年4月には、現代アート界でもっとも注目されているアーティストのひとりヒト・シュタイエルを招聘し、浅草演芸ホール(東洋館)にてアーティストトークを行うなど、企画実施で出来た縁を活かし相次いでイベントを予定しています。

photo by Takashi Osaka
浅草郵便局ショウウィンドウ

photo by Takashi Osaka
浅草線地下街(株)プライス



チラシ